



ほくじょう なかま はなし
牧場の仲間たちのお話

カラスの ビーブビープ

ビーブビープは、どうい^う わけが 巣を
なくしてしま^い、わたしたちが 世話^{せわ}をするよう^に
な^った、カラスの ヒナです。しばらくは カンづめの
ドッグフードを 食べ^たせてあげていま^したが、
まもなく 自分^{じぶん}で 食べ^たり、外^{そと}を 飛^とんで えさを
探^{さが}したり、安全^{あんぜん}に 暮^くらしていけるよう^に な^りました。

ビーブビープは、わたしたちが やっていることを、
いっしょ^{いっしょ}に やるのが 大好き^{だいす}でした。それで、
わたしたちが 牧場^{ほくじょう}の 敷地内^{しきちない}を 歩き回^{あるまわ}る 時^{とき}には、
よく、頭^{あたま}の上^{うえ}や 肩^{かた}に 乗^のっかっ^て きました。



ビーブビーブは、普通の ふつう カラスのように な 鳴きますが、
にんげん 人間の かいわ 会話を まねた まねたような こえ 声も だ 出します。夕方 ゆうがた になって
かぞく 家族が あつ 集まり、おしゃべりしながら たの 楽しく す 過ごしていると、
ビーブビーブも と そばに と 止まって、いっしょに ぺちやくちゃ ぺちやくちゃ
しゃべるのです。

わたしが はたけ 畑で まめ 豆をつもうとしている とき 時には、
ビーブビーブが たびたび たびたび やって来て、わたしの さき 先を い 行き、
わたしが ひろ 拾えるように まめ 豆をつんで じめん 地面に お 落としていったり
しました。ビーブビーブは、むし 虫を さが 探すのも す 好きでした。



わたしたちが やることに 何かと 加わりたがる ビーブビーの 行動が、
まちがった 方向に 行ってしまったことも ありました。いよいよ 麦の
収穫が 始まるうとしていた 最初の 日に、兄が トラックに ガソリンを
入っていた時の ことです。ビーブビーは ヒカヒカ 光る ガソリンの
ふたに 目を 付け、サッと 舞い降りてきて、その ふたを さらって行って
しまったのです。ビーブビーには、それが すばらしい 新しい 宝物のように
見えたのでしょう。トラックの ガスタンクに ふたを しないで 走るのは
危険なので、父が 取りあえず 何か
代わりになる ものを 作業場から
見つけてきてくれました。



さて、収穫は 2週間以上 続きました。そして、ついに 最後の 麦が 刈り取られ、
穀物倉庫に 運ばれました。その年も また 豊作だった ことや、神様が わたしたちを
世話してくださったことを 感謝し、祝う 時が やって来ました。

家族がみんな、家の前のしばぶに集まって
すわっていると、ビーブビーブも、これは何か
特別な時なのにちがいないと気付いて、自分も
お祝いに加わることにしました。ビーブビーブは
木のてっぺんまで飛んで行ってタンクの
ふたを見つめ、それをわたしたちの目の前の
しばぶの上におとしたのです。

ビーブビーブは、いつもわたしたちのことを
理解できたわけではありません。結局のところ、
カラスなので、けれども、良い仲間
あったことに変わりはありません。わたしたちと
いっしょに何かをするのを楽しんで
いたので、

「友はどんな時にも愛するものだ。」

(新改訳聖書、箴言 17:17)